

2010年クリスマス

親愛なる姉妹、友人の皆様

今年も、クリスマスが訪れ、さまざまな背景、文化、経験を持つ世界中に散らばっている私たちを一つに結んでくれます。ベトレヘムと呼ばれる小さな町で起こった出来事を喜び、幼子、エマヌエルー私たちと共におられる神—の誕生を私たちは、心からお祝いしています。

最初のクリスマスの夜、驚嘆の中で、神と人類、神聖なものと平凡なものが、生まれたばかりの幼子の輝かしい美しさのうちに対面します。神と人類は抱き合い、飼い葉桶に暖かさをもたらします。貧しい羊飼いと金持ちの王が、そこで、互いに友として出会います。あのもっとも聖なる夜、驚嘆と喜びによって世界が変容されたように、人々は神の恵みの力によって変容されるのです。神はここに新しい家を見出されました。そうです、あらゆる複雑さをかかえる人類社会が神の住まわれる場所となったのです。

「ひとりのみどりごが私たちのために生まれました。ひとりの男の子が私たちに与えられた。」(イザヤ 9:6) 神は、生まれたばかりの幼子の姿になり、手でさわられるほど、ますます私たちに近づかれます。この幼子は正義をもって世界を治めるために来られます。また、この幼子は、私たちの肉、人間性における神の見える姿です。幼子キリストを私たちの間に生まれさせ、この幼子がほんとうにどのようなものであるか世界に垣間見させること、それがクリスマスです。

「マリアは子を布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊る場所がなかったからである。」(ルカ 2:7) イエスは無力な貧しい、しかし非常に愛された赤ん坊としてこの世に来られました。この赤ん坊は、残念ながら、それほど愛されず世話されていない多くの子どもたちを思いださせるしるしでもあります。叩かれる子ども、見捨てられる子供、性的虐待を受ける子ども、望まれていない子ども、飢えている子ども、殺害される子どもたち…。私たちの今までの人生の中で子どもに対するこれほどまでの暴力を知らされたことがあったでしょうか。私たちはこのような現実の前にひるんでしまいます。しりごみし、テレビのチャンネルを変え、話題を他の方向に変えてしまいます。あまりにも事柄は重くそれ以上、もう何も考えられないのです。

「イエスご自身、子供たちを真ん中、使徒達の最上の席につかせられた」(規約と規則 1:2) ことをニコラ・バレは私たちに思い起こさせています。日本での会の顧問会の折、次のことに関して会として私たちのコミットメントを新たにしました。子ども及び弱い

人々の世話と保護を保証するために私たちにできることはなんでもすると。クリスマスは、次のことを思い出す時です。子どもたち、そして、もっとも弱い人たちのために世界をよりよい場にするようにと、生まれてくるひとりひとりの子どもが、私たちにもういちどチャンスを与えてくれるのだということ。

馬ぶねの前に跪くとき、イエスと同じように「宿屋に場所がない」人々がどれほど沢山いるかを思い起こしてみましよう。そして、「何故？」と問うてみなければなりません。この「何故」は問いのうちでも最も危険な問いです。この「何故？」という問いは私の心に何をもちたらずでしょうか？

この世界に散在する馬小屋は、子どもたちに宿を提供し続けています。この子どもたちに命を与えるためにこそ幼子キリストは来られます。今、彼らは私たちのドアの前に立ち避難所を求めています。私たちは、思い、心、そして魂に彼らを迎え入れるよう求められているのです。誰が、今日の私の生活の中で慰めと暖かさを求めている”小さな人々“でしょうか？

神の言葉を本当に聴くことができるなら…。「いかに美しいことか山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝える。」（イザヤ 52:7）イザヤの平和と幸せの約束は私たちを馬ぶねへと導きます。その馬ぶねにおいて、私たちは命の最初の瞬間から神が私たちと共に居られるということを学ぶのです。神が私たちと共におられるということ、これが受肉の中心的なメッセージです。罪意識やためらい、怠慢はなんら神がわたしたちから遠ざかっていかれる理由にはなりません。過去におけるどんな失敗も私たちへの神の愛を弱めることはありません。飼い葉桶の奇跡、馬小屋の沈黙は、私たちが受けるに値しない神の愛—純粹で、自由に無償で差し出されている愛—について私たちの心に語りかけています。

馬ぶねの単純さと愛深い受容は、私たちが新しい事に出会うとき、無防備で、心を開いており、積極的で、信頼しているようにと招いています。人生によいものをもたらすために自分の分を果たし、不可能に見えることを育み、誰にとっても人生を生きるに値するものとする、弱くて、小さい事柄を信じるというチャンレンジです。クリスマスのメッセージの中心は神が小さなことのうちに来られること、そして、私たちに自分の小ささを信じるよう求めておられるということです。

今日の世界においても、しばしば、預言者イザヤが言うように（イザヤ 9:1）人々が闇の中を歩いていることに気づかされます。それは、時には、先の見えない暗さ、また、脆さ、不確実さ、無意味さの闇であつたりします。しかし、私たちの間にお生まれにな

ったイエスの誕生の奇跡を通して、内から湧きでて他者に向かって流れていくような命と希望が私たちのうちにあると確信しています。

私たちは皆、人生のある時期に“脆さ”^{もろさ}というものを体験したことがあるでしょう。それは、いろいろな体験の中でも、もっとも苦しい、同時に、もっとも実りある体験といえるでしょう。時に、その脆さは私たちを麻痺させ、自分の限界や身体的、精神的衰えに対処するのを不可能にし、さらに、その人の才能や自尊心さえもはぎとってしまうことがあります。

それにもかかわらず、後になってみれば、この脆さ^{もろ}の体験が非常に有益だといえることが多々あります。人生を共に歩いていくためには、支えや連帯によって他の人々と関わっていくことが必要であると、この体験がわからせてくれます。それは、友情の喜びと私たちが自由にする真理をもあらわしています。私は自分の人生において、‘脆さを体験した時’をどのように生きてきたのでしょうか？

自分がいかに小さく、問題から遠いと感じていても、こうした脆さ^{もろ}の体験を通して、他者のために献身する姿勢が深められます。この献身するという行為は、私たちに能力があるかどうかではなくやる気にかかっています。人生の大仕事を成し遂げるために神は、羊飼、ヨセフ、マリア...のように、たびたび、小さな者たちを選ばれるということを私たちは知っています。

マリアは信仰の女性、ヨセフは希望の人、イエスは愛そのものである御子です。このクリスマス、私たちの心に彼らを喜んで迎えることができるよう部屋を用意しましょう。神が私たちと共に居てくださるという深い信仰、神の現存に信頼する希望、神の愛によって鼓舞される愛のために...

マリ・アグネス、方子とともに皆様おひとりひとりに心からクリスマスのお祝いを申し上げます

マリ